

創立40周年祝賀会開く

日本発の殺虫剤を発展へ

日本家庭用殺虫剤工業会

日本家庭用殺虫剤工業会(上山直英会長)は創立40周年を祝い、16日に京都市内のホテルで、会員企業や官公庁をはじめ、業界関係者ら約1500人を招いて、記念講演会を開催した。



上山会長

あいさつした上山会長は、家庭用殺虫剤業界の発展の歴史に加え、殺虫剤の有効成分やデバイス開発においても、「蚊取り線香をはじめ、かとりマット、液体かとり、くん煙剤、エアゾール製品など、全てが日本で開発され、世界に広まっている」と、日本独自の発展を遂げ、製品が世界へ出て行った数少ない産業であることを紹介。その上で、「殺虫剤業界は日本では1000億円規模と小さ

いながら、長く続けることで技術が蓄積され、新しい工夫も生まれてくる。殺虫剤をいかに安全に正しく使っていたかかという知識の普及と、環境に配慮した製品を造ることを、これからも活動の中心として取り組んでいきたい」と、今後の展望を述べた。

また来賓として、山本繁富大阪府健康福祉部薬務課長、福林憲二郎住友化学代表取締役専務らが出席し、工業会の発展を祈って祝辞を述べた。



大屋氏

同工業会の前身は、殺虫剤の原料である除虫菊関連商品の品質を維持するため、第二次世界大戦前に設立された、除虫菊の検定や成分研究を行う「日本除虫菊研究所」に遡る。1957年には、除虫菊の栽培普及と家庭用殺虫剤の販売を行う18社が「日本除虫菊工業会」を設立。71年

「日本殺虫剤工業会」が設立され、01年に現名称に変更された。現在、会員会社は32社(正会員17社、特別会員1社、賛助会員14社)

記念講演会では電通総研のヒューマン・インサイト研究部主任研究員の大屋洋子氏が、「いま」を読みとくキーワード「『ホメ』『ダケ』、そして『タメ』」と題して、現在の若者や社会のトレンドについて、調査データの分析をもとに解説。

一例として、これまで「健康」という言葉で食が売れた時代だったが、現在は、その健康志向のストレス

からの解放として、「これからの解放として、「これからの解放として、「これからの解放として、」飲料が売れている現状や、ダケはいいか」という自分許しの消費の傾向が出ていべると指摘。健康に良いと「健康ブームの反動のよう」なブームがきている」と紹介した。